

昭和24年の農作業風景



成田  
歴史  
玉手箱

●66回●

歴史と伝統文化のまち・成田。市内には、歴史ある文化財が多数あります。

## 富澤庸祐氏の古写真

# 半世紀にわたる郷土の情景を写す



寄贈されたアルバム

「このうれしそうな顔をごらん下さい」と洒落たコメントが付いた下総町民体育祭の一コマ(下段の写真)。撮影者は、滑川で大正時代末から昭和50年代まで香山醤油という醤油醸造業を営むかたわら、趣味で写真を撮り続けた富澤庸祐さんです。

昭和61年81歳で亡くなった富澤さんが撮影した写真は、総点数約13,500点、昭和6年から同57年までの51年間で82冊ものアルバムとして残され、平成7年、遺族より下総歴史民俗資料館へ寄贈されました。写真の内容は、自身の旅行、富澤家の人々・友人などが中心ですが、郷土の自然・風俗・年中行事・学校(行事)・社寺・災害などの写真も多く含まれ、「昭和」という時代を写した貴重な資料となっています。

この資料発見の経緯について、元資料館館長・磯辺大暢さんは、「私が滑河小の教頭時代に、庸祐さんのお孫さんがPTA会長だったことがご縁で、後に実家を新築する際、土蔵の中を見てほしいと言われ、そこでアルバムを見つけました。昔の郷土を知ろう

えで、写真そのものが希少であったことを考えると大変貴重なものだと思います。お孫さんとの出会いが無ければ、アルバムは存在しなかったかもしれませんね」と、当手を振り返ります。

富澤さんは旧下総町のほか、利根川下流域の佐原・神崎などの水郷地帯や旧成田市域にも足を伸ばし同様の写真を残しています。一枚一枚丁寧に貼り、撮影年月と簡単なコメントを記していることが、写真の価値を一層高めています。特に住民の生活に深刻な影響を与えた昭和13・16年の大水害の写真にはくわしい惨状が書かれ、太平洋戦争前後の町の様子や暮らしなどは、時代や背景を克明に映し出しています。近年、富澤さんの写真は、資料館で3回の特別展示が行われ、また、『千葉県の歴史』(近現代の資料編)などにも掲載されています。これからもその存在は語り継がれ、さまざまな形で皆さんの目に触れることでしょう。



昭和40年10月2日、高岡小学校で行われた下総町民体育祭



昭和13年の滑河。①が現在の滑河小学校、②が滑河観音の森、③は現在の県道成田・滑河線

編集後記

本号の玉手箱で掲載した富澤さんの整然としたアルバムを拝見したとき、「写真には活字とは違う説得力がある。その時々的情景もすぐに過去のものになってしまう。その時代の出来事を記録することは自分の生きられた時代にしかできないことだ」と語った郷土史家・川辺春光氏の言葉が脳裏に浮かびました。富澤さんがどんな思いで郷土の写真を撮り続けたのか今となっては分かりませんが、残された写真を見る限り50年・100年後の郷土を語るとき、なくてはならない資料となるはずで、多くの人にその価値を知ってもらおうと開催された「富澤庸祐古写真展」がそれを証明しています。



成田市役所本庁舎(行政棟、議会棟、消防本部、成田消防署)はISO14001の認証登録を受けています。